

第13回

「どんなことも自分の成長につながる」

東北大学 大学院農学研究科・水産資源生態学分野
准教授 伊藤 絹子



仙台駅から地下鉄東西線に乗り青葉山駅で降車、駅直結の青葉山キャンパスにインタビューに伺いました。青葉山を切り開いた広々とした空間に、新しい大学の建物が数多く建っていました。建物の背後には緑樹が美しく、鳥の鳴き声が聞こえました。2017年1月に、雨宮キャンパスから青葉山キャンパスに移られた伊藤絹子先生を、中庭のある農学研究科総合研究棟に訪ねました。

一 出身はどちらでしょうか。

宮城県多賀城市で生まれ育ちました。実家が農家でしたから、周辺は水田や畑でした。家のすぐ前に小川がありましたので川の中にはいり、メダカを採ったり、ザリガニやカエルを採ったりして遊びました。イナゴ採りなどもしました。小さい頃から生き物にふれて育ち、自然のなかの生物に興味がありました。

一 研究者になったきっかけは。

はじめは教員にあこがれていました。教育大学に進学しようかと思っていたところ、高校の生物の先生から、農学部に進学しても教員になれることを聞きました。東北大学の農学部のなかに水産学科があり、先生から水産学科はカキとかホタテとか美味しいものが研究できて面白いと言われ、少し興味が出て受験しました。水産学科に進学したのは、高校の先生の影響が大きかったと思います。

卒論と修論は海洋学研究室で書きました。西澤 敏先生の研究室で、植物プランクトンの生理生態を研究していました。東北大学附属水産実験所のある女川湾で植物プランクトンを採取し、研究室で単離、栄養塩を添加して培養をしました。栄養塩濃度の違いによっ

て、生育速度や細胞の状態がどのように違いがでるかなど、栄養生理学的な研究をしていました。

はじめから研究者になることを希望していた訳ではないのですが、高校で理科を一年ほど教えたあと、文部技官として大学に採用されました。

西澤 敏先生の海洋学研究室に配属されましたが、一年後には狩谷貞二先生の研究室に移り、それまでとは大きく異なる専門分野に携わることになりました。海洋や川や湖沼の水質汚濁、環境汚染による魚病、環境中の微量元素、農薬が水産生物に与える影響など様々な研究に従事しました。そこで新しい勉強を始め、狩谷先生が退官されるまでご一緒しました。

狩谷先生との出会いは、すごく大きい影響がありました。まず、狩谷先生は、研究の合目的性を非常に意識されていました。社会の要請に対してきちんと答えを出すこと、研究をムードでやってはいけないと、よくおっしゃっていました。水産学は応用の学問であるので、社会が抱えている問題を意識するようにとのことです。

一 最近の学生と昔の学生の違いはありますか。

昔の学生と比べて大きな違いはないと思うのですが、まじめで静かな学生が増えたのではないかと思います。積極的に外の現場にでかけ、自分から行動する学生が少なくなったように感じます。

それから、最近では、女子学生と留学生が増加したことでしょうか。中国からの留学生が一番多いのですが、水産学科では、インドネシア、フィリピン、タイが多いです。水産化学や遺伝子情報学などの講座で学ぶ留学生が多いのではないかと思います。自国に帰り、役

人や大学の研究者になる人が多いです。

一学会活動について教えてください。

水産や海洋、生物・生態学関連だけでなく、陸水学会にも入っています。主に研究発表をしているのは、日本水産学会ですが、陸水学会関連の地球惑星科学連合の話題などは宇宙環境まで広がり、水産研究の問題にも役立つことがあり驚くことがあります。

また、学会誌の論文審査委員をすることがありますが、その時に感じることは、何のための研究なのか、どういうことに結びつく研究なのか、明確でない論文があるということです。事実の列挙に終始するのではなく、自分の研究の結果が意味することについて、考察し解釈して、広く伝えることをしてほしいと願っています。

一水産分野で、今、問題となっていることは。

水産分野で、今、問題となっていることは、水産生物の生産力が落ちているのではないかとことです。身近な水産物では、サケやアサリなどの漁獲量の減少、カキなどの養殖生物についても同じようなことがおきています。様々な影響、複合的な要素が絡んでいて、原因の特定は難しいのが現状ですが、栄養の不足があるのではないかとということが問題になっています。しかし、対象が自然現象のことですから、一生懸命研究しても、自然の中の断面しか捉えられないですし、絶えず変化していくものと認識することが大切です。持続可能な利用をめざすための対策の一つとして、資源生物が持っている特性を明らかにすることでしょうか。科学的な資料に基づいて漁獲量の枠を設けて、資源管理に繋げることも大事だと思います。自然の仕組みとそこ中の生物への影響について、人間は完全にはコントロールできません。どのような仕組みで生産が持続されているのか、メカニズムを理解することが必要であると考えます。

一若い人に一言お願いいたします。

出会いを大切にということでしょうか。先生、友達

など、いろいろな方々との出会いで発見があります。その発見から、気づき、考えることができます。

それから、自分の心の声を大事にしてほしいことです。悩みがあるときには、書き出してほしい。頭の中だけでなく文字に起こしてみると、自ずと自分の道が見えてくるものです。悩みは成長への大きなステップです。自分で考えるためのチャンスです。考えるためには基礎知識がやはり必要です。だから勉強は大事です。社会のなかで自分がどのような存在でありたいか、どのように生きていきたいのか、考え、それに向かい（少しずつでいいので）努力することは大切なことです。

どんなことも自分の成長につながると思います。いろいろな活動を通して、多くの人と関わり、学び、自分で考えていくことが、自分の成長に結びつくはずで

一東日本大震災からの教訓は。

実家の多賀市の水田は津波の被害を受けませんが、家屋は半壊状態になりました。修理して住めるようになるまで、一カ月ぐらいかかりました。しかし、多賀城市の親戚の水田は津波が来て、塩害の被害を受けました。真水を流し、震災の次の年は田植えができるまでに回復しました。

東北大学では、宮城県・岩手県沿岸域の水産復興に関するプロジェクト「東北マリンサイエンス拠点形成事業」（文部科学省）に参画しています。このプロジェクトでは漁業復興が目的です。大津波により甚大な被害を受けた漁業を復活させ、壊滅的な被害を受けた浜・町の人々の復興を願うものです。

大津波の水産生物への影響では、種類により、生活の仕方により、また、場所により大きな違いがありました。ヒラメやタラなどの魚類は一時的に漁獲圧が低下したことから、資源が保護されたという側面があるようです。一方、ホッキガイなどは巨大なガレキが埋まっているため、貝桁網が壊れてしまい通常の漁具では獲るのが難しいという問題があります。このほか、名取川河口では、海砂の堆積により河口が狭隘化したことで、低塩分環境が生じ、アサリの大量減耗がおき漁業が再開できていません。水産生物種により影響の出方は様々ですので、対応策も様々、国土交通省など

他の機関との連携が非常に重要になってきていると感じています。

自然災害だけでなく、食料問題、環境問題、エネルギーの問題など、現代社会が抱えている問題はいろいろありますが、すべて「人と自然との関わり合い方」に根ざしていると思います。つまり、一人ひとりの生活の仕方に深く関わっています。現在、快適で便利な生活をおくり、便利な機器に頼っています。人間の知恵で快適な生活ができるようになりましたが、一方では自然と隔離された生活をおくり、自然と触れ合う機会が少なくなっています。自然のしくみに依存して、他の生命活動の結びつきに支えられて生きることができる、という認識は希薄になっているように感じます。

人と自然とはどのように関わりあうべきか、一緒に考えていきたいですし、研究していきたいと思います。

ー仕事と子育ての両立についてアドバイスを。

子どもが小さい時は、実家の母に随分手助けしてもらいました。その頃、心掛けていたのは、職場の人に、子育て中であること、いろいろな事情についてもお話して理解してもらうことでした。大学は恵まれた環境にあったと思いますが、自らの働きかけによって、職場の環境も変わることがあるとも感じました。

また、子どもに対しては、接する時間の長さではなく密度と考え、子どもと向き合う時間を大事にしました。干潟の調査に子どもを連れて行きサンプリングしたこともあります。

職種によっても子育てとの両立の仕方はいろいろあるかと思います。周りの方と上手くコミュニケーションを図り、子どもを大切に思うことを基点に据えることで乗り切ってほしいと思います。

(編集後記)

教員にあこがれていた伊藤先生は、現在でも母校で授業をしていらっしゃるということです。海や川に出かけ調査を行い、食料資源である魚類や貝類の生態と環境との関係について話をされるそうです。

狩谷貞二先生から、どんなことでも自分の「作品」になり、自分が成長することにつながることを学んだということです。

今回のインタビューでは、JANUSの技術顧問でもあった狩谷先生の話をしていただきました。研究の目的を明確にすることを非常に意識されていたとのこと、改めて目的の大切さを熟考していきたいと思いました。

2018年6月